

まえがき

『日本近世生活絵引』の第三期（2015-2016年度）では、南九州編として『薩藩勝景百図』を取り上げました。第二期（2011-2013年度）では、『琉球交易港図屏風』や『八重山蔵元絵師画稿』『琉球寫真景』について共同研究を行ない、奄美・沖縄編を作成しましたが、今期はそれを発展的に継承して、薩摩を中心とした南九州地域を対象にしました。

『日本近世生活絵引』は、庶民の生活を近世の図像資料から取り出して、当時の人々の生活を歴史学的に、また民俗学的に検討するという目的をもっています。この目的にふさわしい南九州地域の資料として、『薩藩勝景百図』を選定しました。『薩藩勝景百図』は、18世紀末から全国的に行なわれていた地誌の編纂に対応して、1815（文化12）年に島津重豪の命により編纂された薩摩藩の地誌で、当時流行していた名所図会の形式に準じて作成されています。その解説書『薩藩勝景百図考』とともに、将軍徳川家斉に献上されました。現在は、国宝「島津家文書」の一部として東京大学史料編纂所に所蔵されています。

『薩藩勝景百図』は、全部で102の景からなります。本書では、そのうち人々の生活が比較的多く描かれている29景を選択し、それぞれの図像の特色によって、「鹿児島城下」「薩南の港」「街道の様子」「苗代川と金山」「寺社と名所」の5つの項目に分けました。これらの図像を見ると、当時の人々が漁をしたり、旅姿で歩いたり、あるいは武士も庶民も同じ場で花見をしたりと、薩摩の生活ぶりがよくわかります。それと同時に、薩摩の国際性も描かれています。鹿児島城下には琉球館があり、港には琉球船が停泊しています。山川港でも、琉球船が3艘ほどはっきりと描かれています。また、苗代川の陶工は朝鮮から来た人々の子孫で、その髪型や着物が朝鮮風に描かれています。「鎖国」であった当時、薩摩の国際性を将軍や他藩に示すという主張が、『薩藩勝景百図』にはうかがえます。

さて、非文字資料研究センターにおける共同研究の一期は3年間ですが、絵引班の対応が遅れて共同研究期間が2年間になってしまいました。時間的に厳しい状況で、主幹の渡辺美季先生を中心に共同研究員全員が力を合わせ、この度本書を刊行することができました。本書作成に当たっては、鹿児島大学法文学部の高津孝先生・丹羽謙治先生に多大なご教示を賜りました。深く感謝申し上げます。また、画像を提供してくださいました東京大学史料編纂所・鹿児島大学附属図書館・鹿児島市立美術館・南さつま市加世田郷土資料館にも深謝申し上げます。

絵引は、歴史学、民俗学にとどまらない様々な専門分野の方々が利用できる図像資料だと思います。ぜひ多くの方に活用していただき、ご意見などをいただければありがたいと思います。

非文字資料研究センター『日本近世生活絵引』南九州編編纂共同研究代表
小熊 誠